

おわんのふるさと

田 添 京 二

まえがき

私がいわゆる僻地に関心を持ちだしたのは、福島へ来てから間もなくのことであった。大学を卒業して研究室に入ったのをしおに、小学生の時から続けていた昆虫採集を断念しえたつもりでいたのに、自然を身近にして懐かしい虫たちの姿を見ると、他愛もなくまた雀百までの踊りを踊り出す仕儀とはなった。虫とりとなれば、ゴパンめのような田んぼでは困る。私たちは、田毎の月みたいなコチャコチャの山田が出てくるとそろそろニヤつき出す。そういう訳で私は、暇を見つけては、僻地を歩き出した。

しかし私には民俗学の素養もなし、都会で生れ、都会で育ってしまった哀しさ、僻地を正しく見つめることなど出来そうにない。むしろ地方の暮らしを内面から知っている人にすれば、下らない、あるいは当り前のことをびっくりしたり、面白がったりしているのだからと思う。そうではあっても、私は、私なりに見た僻地の姿を書きのこして置きたいといつか考えるようになった。私が虫を追いながらの横眼で見ている、僻地の変貌の急激さには、何か只ならぬものさえ感ぜられるからである。

この報文は、一九六〇年八月初め、NHKラジオ「婦人の時間」の取材のために、大沼郡昭和村畑小屋部落をたずねた折のもの。今後機会をうれば、こうした報文を積み重ねて、僻地の変貌とその問題点を探ってゆきたいと望んでいる。なおこの報文はこうしたナマの形のものではあれ、本誌その他に発表している人口・労働力移動研究とじかにつながっているつもりである。

末文ながら、調査に心よく御協力下さった畑小屋の皆さんと、援助を惜しまれなかったNHK福島放送局に謝意を表したい。

「真白なテーブル・クロースの中央に盛った真紅のバラ、打ち合わされるガラスの輝やき、明るいシャンデリアの下でのにぎやかな晚餐がはじまる。やがてジュエリーなロースト・ビーフだろうか、碧眼ブロンドの主賓の前にサーヴされる。アントレに添えて、新鮮なサラダが、シットリとつやのある肌いろに見事なマサ目の浮かぶボールののって出てくる……。」こないだ見たアメリカ映画の一コマだったっけ。だがボクの想像は、その先へとぶ。

「ブロンドが唇を細めて讃嘆する。『マア奥様、素的じゃありませんこと。このグリーン・アスパラガスと肉色のとり合わせったら……スウェーデンものなんザアマショ』。ブルネットが大形に肩をすぼめて『アラ、御冗談ばかり。貴女の旦那様とちがって、宅ときたらまるで甲斐性なしでもの、ジャパニーズ・メイドに決ってますわ。こないだ角のドライヴ・イン・マートで見つけたんですの。スウェーデンもの一分でワン・セット揃っちゃうんですもの』……。」

ぼくの眼の前には、心尽しの松虫草が立ってるけど、真昼だというのにウス暗い戸口からの光りで、花卉のうす紫が一層白茶けて見える。ぼくの左のものあたりには、早くも先程から複数のノミがモゾモゾやっている。コクゾウムシの点々とまじるベチャツとしたごはん、キャベツの塩もみしたのが一つまみ、岩魚のくんせいをダシにしたこれまたキャベツの澄まし汁——「オメエたちくるつっても、こた山の中で、何んもなくってなあ」、さっきから何度も何度もそういつて済まながるおばあさんのお給仕を受けて、ぼくは懸命にゴハンを汁で流しこんでいた。岩魚は仲々獐猛で悪食だから、汁わんを口許へ持ってゆくと、キャベツの間から、カッと口をあけて、無念の形相すさまじいのが眉間に迫ってくる。

ぼくの右となりでNHKのプロデューサー、Fさんも悪戦苦斗している。いろいろには、八月だというのにソダがくすぶ

り、十匹ぐらいずつ串差しにした岩魚、あるいは岩魚型した灰の串差しが立っており、いろりをはさんで、ブロンドならぬ銀髪の老翁がキセルを構える。おじいさんは、今日残り少なくなった伝来の木地部落、大沼郡昭和村畑小屋の長老で小椋五郎さん、木地師の祖、維喬親王四十九代の子孫という。海の彼方の豊かな食卓にいろどりを添えたあの木製サラダ・ボールの多くは、いま、つましいお膳を囲んだ、これら木地師たちの手によってつくり出される。

きのうの朝早く福島を発ったFプロデューサーとぼくは、阿賀川沿いの発電所を眺めながらポツポツ汽車（会津川口線）で行こうなどと風流（？）なことを考えたせいもあって、とうとう日のあるうちには、昭和村役場のある下中津川までしか入れなかった。今朝は役場のジープで大芦まで、そこで材木屋さんの三輪にのりかえて、十一時すぎ、やっと部落の下手を限る台地のふもとまで運んでもらったのである。部落は総数十戸。ぐるりを千二百米級の山々に囲まれた狭い谷が、わずかに河岸台地をつくったところに、ヒッソリと身をよせ合っていた。

小椋さん（もっとも木地師はたいいが小椋姓で、畑小屋でも一軒をのぞいて皆小椋さんなんだが）のお宅にあがったら、あいさつもそこそこに、「オメエたちハラすかしてんだべ」と持ち出されたのが、先刻のお膳だった、ということである。

二

何やら胸のつまった感じで、戸外に出て見る。家のすぐ前の木立ちの下、夏草におおわれて墓石がかたまっている。どれも十六弁の菊の紋がうってある。Fさんがよってきて「どうもすみませんでした。十日も前から頼んどいたんですけど……」。「いや、そうじゃないと思うよ。小椋さん、やっぱりゴチソウつくってくれたんじゃないかな、あれで。納屋のり

「ゴ箱見た？」。ほくは、Fさんをひっぱって納屋につれていった。さっき登山靴のヒモを結ぼうと、納屋のシキイに座った時眼に入ったものなのだ。「何ですかこれ」Fさんは、箱に七分めつまった、せいせいいうづらの卵からピンポン球大の白いものに眼を見はる。「あ、じゃがいもだ」。「ウン、これ土ん中から探し出すだけでも大変だろうけど、きつと冬になったら、ゴハンに炊きこむんじゃないかな。」

身仕度した丑五郎さんが、柄の長いカマを手に出てくる。「いって見っかな」、「エエ、お願いします。遠いんですか」、「インヤ、いっとう近いとこだ」。さつさと歩き出す。そろそろカエデの類がかそかな赤味でそれと知れる雑木林を抜けて、ホウの木だけスبونと天を指して残ってる伐材あとを渡ると、小さなせせらぎに沿って、一挙に山途になる。途と思ったのは、ほんの十歩か二十歩、あとは小沢をあちへとび、こちへとび、そのうちヌマガヤか何かの生えた湿地になり、沢が小滝になるところは、ヤブコギ半分の高捲きになる。ツイサンは、時にカマをふるっては、途をつくってくれる。こちらは子供の時からしみこんでしまったクセで、近くの葉裏にくっついてはいるハムシとか、前をゆくFさんのデンスケにあおられて木蔭からとび立つクシヒゲムシとか、小さな甲虫が自づから眼に入り、自然に足の運びも不規則になるせいもあるが、それにしても丑五郎さんの足の確かなのは恐れ入る。とても七十二才とは思えない。

「いっとう近いとこ」に着くのに、小一時間も歩いたらどうか。周りの景観が変ってくる。小沢は巾二尺位にせまくなつて、もう正面の山肌をあらわした高みからまっすぐにおちてくる。両側は、まだ巨大なブナがかなり残っており、その間にツルツルの坂途がついている。粗末なものだがシユラ（修羅）と称するやつで尾根の方で倒したブナの枝をはらい、一間長さ位の材にしたやつを、すべり落すのだ。ノコギリの音がきこえてくる。「あそこだ」、丑五郎さんのカマの指すあたり、正面の小沢がつくる堆石の上に、山ブドウだろうか、ツルで組んだ柱と屋根だけの小屋が見えた。傾斜が急で、音の死角に入っていたのか、「カン、カン」という刃物の澄んだ音は、すぐ手前まで行つてから、ようやく耳に入ってくる。

十畳敷位に散乱した木っばの堆積をふんで、腰をうかせては見たものの、何とあいさつしたやらといった風で迎えてくれた長男の息子さんの側へゆく。小屋の谷側には、とても小柄なおばあさんが、一心にチヨウナをふるっていて時々チラチラと上眼を使うだけで顔も上げない。せせらぎの音もまじって小椋さんの紹介がききとりにくいのだが、どうやら姿は見せぬが、上手でノコギリの音をさせているのが弟で、長男の嫁は、出来上ったアラガタを運びにいつて、ここにはいない。いつもはその四人でやってる、ということらしい。

「一つ仕事の手順を見せていただけませんか」、Fプロデューサーが、デンスケをまきながら頼む。お前は仕事を続けろ、という意味の言葉を残しておじいさんが先に立つ。

こんどはアゴがヒザにぶつかりそうな急坂だ。シュラの下では弟さんが、二抱えもあるブナと取組んでいる。右手の尾根から斜面にかけて林が明るくすけて見える。その辺りで切り倒したブナの枝を払い、シュラを落して谷すじに集めてくる。それを弟さんが「玉切」っている訳だ。

ちょうど大根を輪切りにするように、大きなノコギリで巾十五センチ位丁度半円になるところまで挽いてくる。ノコギリを抜くと、あとには、わずかに毛筋ほどの挽き跡が見えているにすぎない。クサビでも打つのかな、それとも横からまたノコギリでも入れるのかな、と見ていると、たてかけてあった三尺柄のマキワリみたいなのをひつつかむ。アリアアリヤと眼を見はるうちに、大上段にふりかぶると、ためらいも見せず、「シャッ」というような鋭どいかけ声とともにふり下ろした。「カーン」——小気味のよい音がしたと思ったら、見事に新鮮なもくめの腹を返して、半円の部分は親材のかわらにころがっていた。

思わずFさんと顔見合わせて感心してしまう。急な斜面で、片足はブナ材に、山足は流れにぬれた石にかけての早業な

のだ。イギリスの天才ゴルフファー、ジョージ・ダンカン、ツカツカとボールに歩みよると、ワッグルもせず抜打ちにした、というが、あれだなあとと思う。弟さんは、別に何という様子も示さず、もう次のノコギリをひきにかかる。

小屋に戻ると、兄さんの方は、今しがたの半円の材にクサビを入れて四つに割っている。子供の頭ほどの木ツチで、スカン、スカンと実に手早く、丁度デコレーション・ケーキを八つ割りにしたような形にしてゆく。この音をさっき下で聞いたのだ。

おじいさんが何かいいつけると、息子さんはクサビと木ツチをすてて、ナタをとる。ふり上げると同時に左手は、ケーキをつかんで台木の上ですえている。サク、サク、サクと三度ふり下ろすと、ケーキ型のうすい方がとび、厚い方の両側もそげ落ちて、大体厚さ七・八センチ、さしわたし十五・六センチほどの四角になる。こんどは左手で廻したり、立てたりしながら、もっと軽くナタを動かすと、稜がおちて八角になり、底の方もゴツゴツした八角になって大体おわんのかっこうになってくる。それをヒョイと谷側の下手に居るおばあさんの左手のところへ投げてやる。

「いい音ですよ」——モニターのイヤ・フォンをおさえながら、商売気を出してFさんがニコツとする。ほくたちに背を向けているおばあさんの前に廻って、「おばあ………」と呼びかけようとして、危うく「おば………さん」に喰いとめた。先刻のおじいさんの紹介がよくききとれなかったのだけど、もし弟さんのお嫁さんだとしたら……これまでも何度となくやったバツの悪い失敗をとたんに思い出したのだ。

彼女の方はそれでも顔も上げずに、両手で持ったチョウナをふるっている。一尺ほどの木の柄に直角に、内側に向けてそった大きな丸ノミがついたようなものだ。ハダシの両足は、息子さんの方から投げられたおわんを、親指でおさえて、チョウナの一撃ごとにクルクルと廻してゆく。五回か六回やると中がエグれて、アラガタとしてはこれで仕上りになる。

しかしすばらしく切れのよいチョウナの刃先は、彼女の足指から一寸とはなれていないところにザツと音を立てて喰い

込むのだ。こっちの方がビクビクして、「足をけがすることありませんか」、つい愚問が出てしまう。「そんなこたあねえなあ……、もう嫁に来る前からやってたあ……嫁にくるたってこれができなきやあしようがねえもんなあ……フフフフ」——声はとも若かったし、やっとこっちへ向けた笑顔は、陽焼けて、シワが深いけどどこか可愛らしいみたいなおころさえ残っている。危なかったわい、と改めてヒヤリとする。

木地部落のよめとりは、農耕型の僻地と大分ちがっている。後者の場合には、封鎖的な部落内部での近親婚が多くあるが、木地部落だと、県内、いやもっと広く各地に転在する木地部落相互に通婚が行われる。一般農村との通婚は、木地師が主観的には、位が上だという観念を持っていることもあるし、何より労働力として意味をなさない為に殆んど行われぬ。ここ畑小屋の場合にも、はるか南の館岩村、特に高杖原（タカツツバラ）の保城（ホジョウ）という木地部落（現在は次第に開拓民化しつつあるが）と親類関係にある家が多いという。

いまにも泣きだしそうだった空から、とうとうシヨボシヨボと雨が落ち始めた。真夏というのにうすら寒くなってくる。ぼくたちは逃げ腰になるが、二人は平気だ。

「冬は出来ないでしよう」とぼく。「いやア、やっぱりやる。やらにゃしようねえもん」とおばさん。「冬はエライ（大麥だ）なあ——と息子さんが口をそえる——こうして男がとったカタを、アレんとこ投げてやる。そうすつとガツチガチにしみて（凍って）っから、キーンと金物みたいな音がすらあ。それ、こんだカァチャンが足でおさえて中をくる。足はみんなバッカバッカなあ、しもけてしまつて。」おばさんは笑いながら「んだなあ、若葉がおおくなるまで足かいがってるな、こちらの女は……。」

「冬もこんな小屋でやるんですか。」「ほんとの真冬は、材を玉切ったのを家のそばさ運んどいてやる。ここらは三日

「も四日もふぶいて六尺、七尺積むからなあ。でもそうなんねえ間は、小屋でやんだ。三方囲いはすっけど、そりゃ尻から冷えてきてエライわ。」「たき火にあぶって、木さあつためながらやんだ。」とおばさんがつけ加える。

「これどうして運ぶんですか。」「どうしてもこうしてもねえ、背中使って下ろすしかねえ。どうも昨日から見るもの、きくもの、大変なことが多いもので、へまな質問ばかりしている。Fさんもデンスケの調整をするようなふりをして、下を向きながらニヤニヤしている。おばさんが話をついでくれて、アラガタを重ねて見せながら、「こうして十二枚重ねてな、ナワでからげてな、しよいこでしよだよ、こりゃおなごの仕事でな。」「いくつ位」「六本位だなあ」「重いんでしよ。」「そう……十二、三貫はあっべし、ナマだもんなあ……」。ほくはこの小柄なおばさんが、十二、三貫の荷をかついで、来る時に通ったあの途もついてない沢を下りられるとはどうしても思えず、こともなげにそういつてのけて、また中ぐりの仕事に戻ったうすい肩の動きをしばし見つめていた。

三

皆そろっての夕食は、Fさんが用意してきたカンヅメやお菓子を全部台所の方へ提供したこともあって、一きわにぎやかだった。

おばさんが、Fさんから受取るなり、仏壇にそなえたのと、おじいさんが、お孫さんたちといっしょにキャラメルをしゃぶりながら、「こりゃまあ、ほんにいい味のもんだな」と何度も何度もくり返していたのが印象的だった。おぜんが下がると、いれかわりにFさんのデンスケが出てくる。

「女の人が、アラガタ背負って下りるのは大変でしょうね」……ほくは、先刻のショックがまだ残っていて、真先にきいてしまう。

ほくの眼がついそっちへ行つたものだから、さっきの小柄な弟さんの奥さんが受取る。

「こころ辺のは、もう男も女もなく働かなかねえだからなあ。まあ働かねえではやっていかねえんだしなあ。」
Fさんがおぼあさんの方へ切りかえる。「おぼあさんも前にはかついだんでしよう。」

「ああ、若い時はよっぽどしました。いま時は、まあ家の留守居して、マンマでもたいて、孫でも見ていっけど、若い時はよっぽど働いたあ。」

始めて顔を合わせた長男の奥さんは、ガツチリした方で、ザックバランな感じ。「夏つてえと四時には起きんなあ。まあ起きてえと男たちはオマンマ喰い喰いイグ（行く）。はあそのあとすぐオナゴさいグ。暗くなるまで男と同じに働くわ。だから背中などタコだらけになってべ、たしか。はだかになって見れば。いわばスタイルはワリイやなこの辺の人は。オメエたち来て見て分つべ、やつぱ。ウンとスタイルはワリイわなあ。」「イエイエどういたしまして……」、Fさんが真顔でいうから、皆ワツと笑い出してしまふ。

しばらく、山村での女の人のコマゴマした仕事の話が続く。猫の額ほどだが、畑の手入れ、ニワトリの世話、大事なおかずになる、山菜や、キノコとり、せんたくに炊事、子供の世話……。

「いや家に居る者も仲々気が気でねえぞい、——おぼあさんが割つて入る——出てる者は、どれも危ねえ仕事でなあ。ほれ、さつきいたつたべ、あのカアチャン、家の縁つづきなんだ、あの人。その亭主な、四十二だったか。それなんかやつぱし、すごく太かったものな、トチの木な。その下んになって。逆がえりしたから逃げおくれ、そこでな……。そういう人、数あるわい。去年かい、このしでも雪ソリの下になった、なんてな。だから家に居る人、気が気でねえわい。家さ帰つてきて、顔見せるまではな。」

「んだべなあ」誰か男の人がポツリといい、皆、ウンウンというようにうなづく。それぞれに作業の危なさを味わつて

きているのだろう。顔見るまでは心配だ、という不安は、頭の上からいつとびおり自殺の人間だの、金づち、看板、日本刀まで、何がふつてくるか分らぬし、その角を廻ったとたんダンブがぶつかつてくるかも知れぬ、戦場のような都会の中心だけでなしに、こんな静かな山奥にもあるんだな、などと考えていたら、Fさんが、次の質問をしている。

「で、皆さんの楽しみっていったらどんなことでしょう。」

すぐには返事が出てこない。ちょっと顔を上げて見廻すと、いつも口切り役の兄さんの奥さんまで、眉をよせて考えてしまっている。

「ンだなあー。気持よく仕事さハカがいつて、夜にでも、まあそろってラジオで歌きいたり……」、先刻マキワリみたいな奴で大きなブナを割って見せた、弟さんが、アゴをふつた方を見ると、なるほど、トランジスターのラジオが、仏壇の脇に鎮座している。弟さんは途中でうまい返事になってない、と思ったのか、照れ臭そうに黙ってしまう。

「オナゴの楽しみいたらなあ——兄さんの奥さんがあとをつぐ——オメエたちに笑われっかも知んねえけじよも、峠越えてな、転石峠（コロブシ峠、一、一一五米）だなあ、三里はあんべ、それ越えて、バスがあっから、一日に二、三本、それで田島の町さいつてな、パーマかけてくることかなあ。」「帰りも峠越えて?」「そりゃそうだあ、オメエ。ほかにどうしる……一日仕事だなあ、朝出て、日の長え頃でも、うす暗くなって帰ってくるなあ。」「楽しみつていっても仲々大変ですね」、ボクはパーマがのびたなんでもなしに、先の方半分だけが縮れた奥さんの髪を見ながら、ついまたつまらぬことをいってしまう。

「でもなあ、荷物しよつてる訳でねえしな、オナゴたちばっかで、まあ昔話したり、子供の学校の話したりな、ブラブラライグだよ。」「すぐ横にいた弟さんの奥さんが、義姉さんのヒザをたたいでもう笑い出しながら、「ホレ、あのバス。おらたちのりつけねえから、動く拍子に一番うしろまでハネて（走って、という意味）って、えらそうなオヤジさんの上に

すわっちゃまったあ……」あとは、その時の情景を想い出したんだろう、オナゴたちの大爆笑で、モニターを耳につけてたFさんは、ガンときたらしく、眼をパチクリさせてイヤ・フォーンをひきぬいている。

はしたなき女どもじゃ、といった風で、「茶でもいれんか」とおじいさんにうながされた奥さん方は、笑い涙をふきふき土間の方へ。残った男の人たちには少し固い話が好きみたい。

「ヤマ仕事は、十戸全部共同だって、伺いましたけど……」

「ンだ、何でも十軒一緒にやんだ。」とおじいさん。

「それは、ずっと前からそういう形なんですか。」

「ンだ。こりゃ木地屋のしきたりともいうんかな、ここではずっーとそうしてやってんだ。」

「それで不公平になったり、不満が出たりすることないですか」。お兄さんが、笑いながら返事にかけて出る。

「そういうことなんねえんだな。ソレ十戸だら十戸の人が、皆集って、一括して仕事してる訳でしょ。原木代でも十万だら十万を、一戸一万づつ出し合って買ってくる。各戸から人間が同じづつ、おやじとカカサマと二人出てけば、結局同じ訳だべ。そうして皆同じづつ分担してやれば、結局不公平にならねえ。」

「手の早いおそいがあるでしょう。」

「そりゃ多少はあつけど、早い人がおそい人をおぎなってやってゆく他ねえ訳だなあ。とつても共同仕事は、そういうコマイこと言い出すと、しめえにラチあかなくなっちゃうんだ。ここじゃあ他人だからかまってらんねえなんて考えはハア、まずねえだな。」

「親類同志の家が多いっていうことありますかしら……。」

「ウーン、親類っていうばかりでもねえなあ。まあ木地屋の血統っていう血統は、ほんに一風らがうだなあ。」——お兄さんは、半ば苦笑しながら、しかし満更そこにプライドを感じていないでもない、といった口調でいった。すぐ弟さんが後をつぐ。

「そんだから結局貧乏してぐってことになる訳だ」——いってしまつて自分も笑いながら、「まあ人をかまわねえで、ワガ(自分)さえよけりゃいいってえやり方してけば、コレまあズバ抜けた財閥も畑小屋で、二、三は出来んだよ。ところが、それが何ともソレ出来ねえだから……お互いに助け合う……何ともハア、皆同んなじだ。」

お兄さんが、うなづきながらしめくくる。

「やっぱり、こういう部落では、何んぼ金持つてたつてさ、冬医者にかかるなんていう場合には、金ではいかれねえかな。となりの人頼るほかねえ。ソリにのせて皆して送つてやつとか何とか。だからこういう部落に住んでは、メモエの欲得ばかり考えては生活できなくなつちまう訳だ。そうすつと、あんまり欲かかねえ方がいいんでねえか、つてことになつちまう訳なんだなあ。」

お茶とキウリの漬け物と、ボクたちの提供したキャラメルが運ばれてきて、しばし話が切れる。伝来の共同作業の形を、この位崩さずに残している所は珍らしいんじゃないかな、と思ひながら、塩からい漬け物とお茶をチャンポンにやる。

Fさんが、テープをかえたのをしおに話をすすめる。

「アラガタ一枚どの位に売れるんですか。」

「十七円かそこらが相場だな、若松へ持つてつてな」——お兄さんの方が、キセルを上手に吸いつけながら答える。「それで手間はどの位になりますか。」「原木代がまあ一枚五円、ここから若松までのトラックが二円五十銭、荷作りのナワ代が五十銭、山からこんど道路まで持つてくんのが二円……だから十七円つても、七円しかねえことになる。」

「そして、一日に何個位できますか?」。「んだなあ、一日にまあ、つえー人で、まあ百枚だべな」。「月、三千枚ですか」。「いやあ、平均百はいかねえだから、とてもとても……」。「それは、伐木まで勤定に入れて、ですか」。「なんでなんで、それだったら大変だあ。玉切るところからだなあ」。

それまでお兄さんとFさんのやりとりを黙ってきいていた弟さんが、横あいから口をはさむ。「それは、カアチャンと一緒にだよ。一人ではできねえんだから……。一番かせいで、一万五、六千とこだな。自分たちは、自由労務者だから、時間に制限がねえ訳なんだ。一日に十時間も十二時間もやんだよ、この辺の人は、全部。そうしてやっつて、喰ってかれねえんだから……。そんなに割のワリイ仕事なら、やめればいいでねえか、といわれればそれまでだがなあ……」。

「単価を上げてくれっていう交渉はできないんですか」とほく。

「ウーン、いろいろ世話かけちまってるでなあ、義理でえものがあってなあ、お願ひえしてはみてるども……」。お兄さんのモソモソした返事を、弟さんがくやしそうに続ける。「一枚もう一円手間があつと、ちがうんだ。四、五年前までは、も少し割のいい時もあつたんだが、若松の方も雇人の手間が上つて苦しいとか、他のヤマではもつと安くやつてる、とか、バイヤーがしめてくつから、とか、だんだんおされてきちまってるんだなあ」。

ぼくたちが調べてきたところでは、横浜渡りで、四十七、八円から五十五円位、これがアメリカでは、二百円以上で売られている。若松の業者は、このアラガタを乾燥し、ロクロで仕上げ、上塗りをかけて、出す訳だが、これだけの事に三、四十円では、やはり楽でもあるまい。結局、何段かになっている中間のバイヤーのもうけが、ふくらみすぎているように思える。

さつきから、まぶたがふくらんでくつきそうになりながら、ダンスケによりそっていたお孫さんたちが、おじいさんのとどめの一喝で、スゴスゴと寢部屋に立ってゆく。上の男の子は、「オラ長男だから、木地師になる」、胸をはってF

さんに答えていたっけ、そんなことを想い出しながら、後姿を見送る。

「さっきの仕事場が一番近い方なんですか」、雨の中の沢下りでへこたれたらしいFさんがきく。「んだ。サルッコみていに、だんだん山ん中さ入ってくんだ」とおじいさん。「木がないんですか。廻りは原始林にとりまかれてるみたいだけど……」。「イヤ、ないというんではネェんだ。ただみんなオカミのやまだからな、施行計画いうのがあって、いくら近いところ近いところ頼んでもダメなんだなあ」、おじいさんは、どうにもならんという風に首をふる。

弟さんは若いだけに口をとんがらかして話し出す。

「それもね、畑小屋の人は結局ブナがほしい訳だよな。そりゃナラが少し位まじってたって仕方がねえけど、ここ二、三年なんか、大半ナラみてえなところ払い下げてんだ。ほんとにいいところは、パルプ業者に払い下げっちまう。林区さま（営林署の職員のこと）も、こんだらちいちゃなところ、相手にしちやおられんだろうとも思うけど……」。

「特売がこの二、三年少なくなってるな、仕事にならん。それで、公売のヤマだな、入札して買わんと手が避んじまう。これは競争だから高くてなあ」とおじいさん。

「何石位払い下げになったんですか。」

「畑小屋全部で、二千なんぼかです。そりゃ量的に二千なんぼだったって、ほんとに木地カタに使われったことは、まあ三分の一、いや四分の一だな。」

「で、払下代金は？」

「いや、それがね、十八万なんだがね、だんだん山代金が高くなってね。今年はとっても払えねかったんで、オヤカタに借りたんです。」

「オヤカタっていいますと？」

「若松のサナダボール——ときこえる——の工場のおヤカタです。業者ちゅうんか……。こんだの特売山にはブナ材が
こんだけあつから、サナダボールもこんだけ出せつから、山代金かしてくんねえか、つてね。個人個人金持てれば、な
あにマキに切つても……。こんな位い、二十五円や三十円に売れつから、ずっと得なんだが、それもできねえ。アキアゲが
あるしなあ。」、弟さんの口調が、だんだん暗くなる。

「アキアゲ？」と首をかしげると、中グリの奥さんが助けてくれる。

「雪のふる前に秋上げしてなあ、米の十俵とか二十俵とか、ミソとか、雪のとけるまで喰う蓄えするんだ。冬の手当はし
たけじよも、そんな金持つてる人は誰もいんねえから取引先から前借りした訳だあ……。まあ大体金は持ちつけねえもん。」
「焼き子みたいになつてるんですね」と、のどまで出かかつてやめた。

結局の話、山代金ばかりでなしに、冬場の生活費まで、オヤカタに前借りしてしまつてゐる。その借金は、アラガタで
返済してゆく、という形である。意識の中では、依然として「自由労働者」であり、自前の生産者のつもり、ただ「いろ
いろと義理ができ」てしまった、と感じてゐるだけだ。そしてまた、彼らのやつてる毎日の仕事そのものは、たしかに、
前借りをしようとしまいとちつとも變つてはいない。それは、一年前、十年前、いや何代も何代も前から、同じ道具と、
同じ仕事の手順と、同じ共同労働で続いてきたのだ。

しかし今や、それを包んでゐる社会関係が質的に變つてしまつてゐる。ついこの間までは、共同体にまともまつてゐるに
せよ、畑小屋の人たちは、自前の、経済的には独立の主体であつた。そういうものとしては、若松の業者と、ともかくも
対等の取引関係に立つてゐた。それがいま、支配と被支配の関係におきかえられつた。しかもそこには、單純に、資

本の支配は近代化といってしまうえないふるさがまつわりついている。いわば、共同労働の枠をつかって、そっくり部落ごと、前貸しの網がかぶせられてしまった。これからは、したくたって廃業もできないし、共同労働だから、部落の他の人たちの手前、夜逃げの自由もあるまい。いずれは、この網がしめられて、さなくとも苦しい山合いの暮しは、もう一層きつくなってゆくのではないだろうか。^(注)輸出価格のカベと、原木代の値上りと、その両方からのハサミ打ちが、部落全体をくくり合わせたまま、こんなところへ追い込んでしまったのである。

(注) しめ上げは、ボクたちが思っていたより早くやってきた。翌一九六一年の冬に、Fさんは、テレビ・カメラと一緒に、も一度畑小屋を訪ねた。オヤカタは、サラダ・ボールの輸出が伸びて、南会津の田島町や、館岩村の機械製品がどんどん出はじめたことを理由に、カカサマたちの仕事だった中ゲリは、今後若松の工場でやる、その代り単価を二円切り下げる、といってきたのである。

どうしても話が沈みがちになってしまうので、話題をきりかえて見る。

「さっき、ヤマでお仕事見せてもらって驚きました。大変な腕前ですね。あの玉切るとこなんか……。」
おじいさんが、ニコニコして、かかえていた立てヒザをほどくと、前にのり出してくる。

「イヤイヤ、この頃は、木地屋の腕めえも落ちたもんだ。オラの小せえ頃にも、木地屋の名人ちゅうのがいたもんだ。昔は、あんなサナダボールなんて簡単なもんでなしに、チョウナ一本で、いろんな細工もの作ったなあ。その名人にしたらからが、フチにデコボコ模様のある盆な、それつくっ時なんぞ、一枚の型紙で、何んぼでも打ってったなあ。木の上の型紙さこう置いて、チョウナでパツと打つ、チョウナの刃は、紙のフチさなめっけど、切りはしねえんだなあ。だからソ

レ、型紙は、何度でも使えるって訳だなあ。」

お家の人たちは、またはじまった、という顔つきでニヤニヤしながらきいているが、ボクたちは、節の太いおじいさんの手ぶりを追いながら感心してしまう。

「以前は、木地師っていうと、いばってたもんだそうですね。」

「ウーン、たしかに格式は高かっただなあ。だってオラが覚えあるようになってからが、エボシ、ヒタタレは、あつたなあ。昔は、往来手形を持っててな、番所でも何でも左右に通れた。どこまでいくからそれ馬ヲ出せ、といえは出したっていうからなあ。」

少し油が切れてきたのか、ジーツとかすかなシンの燃える音を立てるランプのホヤの中に、昔の情景が映りでもしているように、見上げながら、おじいさんは、また語り出す。

「オラの父親、ハタチの頃まで頭ゆってたってなあ」「チョンマゲですか」「ンだ、オラの父親も、木地師は、さむれエなんだから、土ン百姓みたいに、泥コネっことはしてなんねえ、刃物持つ手が、ニブくなる、ってよくいったなあ。まあオラのジイサマの時代までなんだ、とてもとても、なんほいばりくさったかしんねえだなあ。シモの大昔だかの名主というのが、むつかしい話持ってきて、ラチが明かねエ。そしたらジイサマ、ポツと立って奥へひっこんだ。こんだ出てきたら、ソレ、エボシ、ヒタタレで、下りおろう、ちゅってつつ立ったら、相手は、土間へとんで下りて、頭さすりつけたっていうなあ。」

ちよっと間があつて、「それがこの頃は、ほかへいったって、こっばすかしくって、木地屋だなんていわれねえわい」、お兄さんの奥さんが、サバツとした調子でいう。おじいさんも、苦笑いしながら、「あんまりいばりくさって、いばりくさって、とうとうバチが当たったんだべなあ」。

豆台風の残していった風もおさまったのか、話が途切れると、秋を思わすように、しげく虫が鳴いていた。

四

何やら碧い海の中をくぐってゆくような夢を見ていた。眼をあけると、中二階みたいな屋根裏部屋の窓一杯に抜けるような青空がのぞいている。首を廻すと、Fさんは、たたんだふとんによりかかって、タバコに火をつけようというところ。「何時ごろ?」「まだ早いですよ、六時半。今日は、若松まで行けばいいんだから。」「起きるよ、もう眠くない。ぼく、もしよかったら、おぼさんたちが、パーマかけに行く峠を越えて見たいんだよ。Fさんが眼をむく。物好きにも程がある、といった顔だ。「天氣がいいし、せっかくだから、この辺の蝶や甲虫の分布を調べながら……。田島の町で落ち合うようにしちゃいけないかしら。」「いや、私はいけませんよ。かまわないけど、大変でしょ。」「何てこたないよ。バスの時間表を見せて」。

何とか、夕方には若松に着けると分って下へおりる。こっちにとっては早いつもりだが、もう皆仕事に出でしまつて、おじいさんだけが、いろりばたで、ラジオをきいている。ぬるくなったごはんを、みそ汁で流し込んでいたら、「ホレ、生み立てください」。おぼさんが、卵をもってきて下さる。

お茶をいただきながら、夕べ聴き残した質問を持ち出して見る。「安保条約で、大きなデモがあったり、あの時、この辺ではいかがでした。おじいさんのほほが急にしまる。ややあって、「あん時は、ほんに大変だったなあ。」「条約そのものには、賛成の方と反対の方と、どっちが多いですか、この辺で……。」「いや、ほんに大変だった。皆ここに集まつて、このラジオきいてな、心配してたつた。」「心配っていうと、その……デモがいかなっていうので、心配な訳ですか」。

おじいさんは眉をよせてしまって、齒のない口をモグモグさせるが、どうしても返事は出てこない。何をきいても、「ほんに大変だったなあ」だけなのである。とうとう根負けして、峠越えの道を教えてもらうことにする。とたんに顔がゆるんで、口がほぐれる。「この辺の山はな、山のてっぺんに谷地（ヤジ）があんだ。田んぼみたいな原っぱだなあ。袖途が何本もあつから、途中まで送っていく。峠へ着いたら、こんだ右に右にといくんた」。

おじいさんが仕度に入ったので、ほくたちも、中二階へ。リュックを下げて急な梯子を下りかけると、若いあけっぱなしの笑い声があつてくる。真白いエリをかけた上っぱりに山バカマ、手拭をあねさんかぶりにしたホツペタの赤い娘さんが土間の上りがまちに腰かけて、おばあさんと早口で話している。ほくたちがゆくと、ピョコンとおじぎする。小椋さんのお孫さんで、最近、部落の他の家へ嫁いだんだ、という。「ホレ、おめえ、いつも歌ってる、なんだかい歌、あれエヌエッチのお客さんにきかせてあげれ。録音にとつてって放送すつと」——おばあさんがからかうと、キャッキヤと笑いこける。

「ええ、歌でもお話でも、何でもどうぞ」Fさんが、マイクを出す。「昨日も、途で会う女の方が、皆白いエリかけてるんで、お祭かなんかかと思いました。」Fさんがいうと、立ちかけていたおばあさんが受けて、「イヤア、そでねえんだ。たしなみだなあ。こんだら山の途でも、人様の前さ出るんだから、さっぱりしねえとなあ。オメエタチが銀座をおしやれして通つとおんなじだなあ」。

おばあさんが、台所の方へ行つたのを見すまして、尋ねる。「安保条約の時、この辺の皆さんも大分心配されてた、つていうんですが、どんなことが話になったんですか」。若奥さんはちよつと考え込んだが、「そりゃ皆心配したあ。あれで政府の方が倒されちまつたら、ゼンガクレンや組合が、せめてきてな、ここらでも木地屋となれば皆殺しされちまうべした、実にサラリといつてのけた。二の句がつけぬ、というのはああいう時をいうんだらう。ついちらと横眼を使う

とFさんは、半分口をあけて、うなづくように首をふりながら、若奥さんの口許を見つめたまんま……。「んだらいくか」とおじいさんが、例の大ガマを突いて表から廻って入ってこなかったら、あの奇妙な間はどんな終り方をしたことか。

分れ途まで送ってくれるFさんが、声をひそめて「皆殺しのうたですねえ」。いまだに衝撃からさめてない、といった眼つきだ。「あんた、ダランと口あいてたよ」、「田添さんだって、口をバクバクするだけで……」、「顔見合わせてふぎ出してしまおう。「あそこ放送に使えますか。役場のジープが来るまで大分時間あるから、きき直して、使うとこだけメモしときます」。「サー、ちょっと使う自信がないなあ。あれどこへ置けば、ピタリとはまるのか……。なんとか景氣の世の中で、岩魚のおつゆに豆みたいいなジャガイモ食べながら、あんなすごい労働させられて……。それでも意識の上では、天皇家とのつながりの方が強い、ってことなのか……。あ、ちょっとまって、オオヒカゲ」、うす暗い川沿いのヤブの中をぬってとぶ蝶の姿に、ほくは走り出す。ジャノメチヨウの仲間では、ズバ抜けて大きい奴だ。地味な茶色でパツとはしないが、産地によって、少しづつ紋の出方や色めがちがうので、見逃す訳にはゆかない。ユックリとぶのだが、樹間をヌラクラと逃げるコースが、一々こちらの意表をつく、といったたちの蝶で、一汗かいてしまう。途に戻って二人の後を追う。何本めかの袖途を分けたところで、立ち止った二人に追いつく。「ここから峠まで一本途だ。荊り払いしてねえが、氣いつけてな」。

二日間味わい通しかったかざらない親切をも一度心に受けて歩き出す。手をふろうと、ふり返って見たが、もう二人の姿は、ブナ林にさえぎられていた。

沢沿いの小途は、まだしっとり朝つゆを置いた両側の草におおわれて分りにくい。ももから下は、完全にズブ濡れ、キヤラバンシューズが、一步ごとにゴボリゴボリと不粋な音を立てる。途は沢を離れてから歩き易くなって、かつては沢が

流れていたと思われる空谷にかかる。朝の陽は、頭の上、谷の両側の崖っぶちを明るく照らしているが、谷あいには、何か青味を帯びたような空気が満ちて、海の底にいるみたいな心地がする。

風雨にさらされて白骨を思わせる倒木に腰かけて、靴の中の水をすてると一服だ。タバコの煙が、細くまっすぐ一間も立つ。それを見上げた、その眼の先を、素晴らしい灰青色の翅がかすめる。オオゴマシシミだ。これで県内では四番めの新しい産地を分布記録に加えたことになる。暗い木立ちを背景に、まるで深海に遊ぶ優雅な魚のよう。いつ出会っても夢を見ているみたいな気分にかきかわれてしまう。モンシロチョウを一廻り小さくしたほどの大きさだが、ほんとにシジミ貝のように小粒な種類の多いシジミチョウ仲間では、一番大柄な方だ。とまる時には翅を立てて裏地を見せるが、こちらは、白地にゴマを散らして、わずかに根元に青い粉をはいただけ。しかし翅表は、パステル調のしぶく落着いた空色の地を、つやのある黒帯がふちどり、多からず少なからず黒点を配して白黒ダンダラのおおやかな触角とのうつりもよく、まあどうしてこういうバランスのとれた代物を自然はつくれるのか、と讚嘆するばかりだ。いまも彼女は、その翅をひるがえして崖ぎわに舞いよると、黒紫の小花を下の方から小点大に見せ始めたクロバナヒキオコシにたわむれる、と見るや、ツト下手へとび去ってゆく。ウツトリと眼で追っていたほくは、「アチチ」ととび上る。タバコの火に、左の中指を火ぶくれになるほど焼かれて、一ぺんに夢幻境から追い出された。

一間ほど先まで、ふりとばしてしまったタバコが、草の根本で煙を上げている。ふみ消しておこうと、濡れ靴をつっかけて立ち上る。ギョッと乗った足のすぐ横の石と石の間に、妙なものがある。かがんで見ると、コチャコチャと縮んだ翅を背負って、胴体ばかり異様に大きく見えるオオゴマシシミ。地中からはい出してきて、羽化したばかりなのだ。この蝶は、奇妙な生活歴を辿る変り者で、卵からかえると、幼虫時代の前半を、ふつうの蝶の仔虫と同じように、食草——ヒキオコシの類——の花や子房を食べて育つ。それが、四令になると、クシケアリがやってきて、エンヤコラと、地中の自分

たちの巣にひきずり込む。仔虫はこの頃になると蜜線が開いて、身体からアリの好きな蜜が出てくるのだ。アリは、蜜のオヤツがほしくなると、仔虫をトントン叩いて催促する。それでは仔虫の方は何を喰ってるか、というと驚くなかれ、クシケアリの幼虫を食べているのだ。まことに珍妙な共存関係という他はない。オオゴマシジミの仔虫は、穴の中で蛹になり、七月の末か八月の初め頃（南会津は、もっと早くて七月の半ばから）、蛹のカラを破って出てくる。翅のびきらないうちに、いまぼくの見ているような姿で地上へ脱出してくる、という訳である。

のびきらぬ翅をつまんで、翅脈を圧迫すると、俄か畸型になってしまうので、小枝でソツとつついてのひらにおし上げる。眼のそばへ持つてくると、細かくふるえて前脚を動かそうとする。繊細な黒の毛に包まれた、お腹をのぼしたり、縮めたりしているのが、いかにもポテッとした感じだし、かずかにのぞく翅表の黒のふちどりの巾広さから見て、雌のようだ。

眺めているうちにぼくは、フトおかしくなった。オオゴマシジミのいるような山の中で、人間が生活しているのは不自然だなあ、と思ったのである。この蝶は、東北から中部地方にかけて、大体標高千米以上の山岳地帯にだけすんでいるのだが、分布はかなり局地的だ。決して高山の蝶というのではないけれども、いうならば、根っからの深山の蝶なのだ。人間がその連中となりつきあいをしようとなると、こいつはコトだなあ——山の中へ入った時のくせで、ぼくは「コトだなあ」というところを、大声の独りごとで、心持ち翅ののびてきた蝶を、崖よりの少し高くなった岩の上に戻してやる。「ふんづける人も通らないけど……」。リュックを背負って見上げると、峠への途は、そこから傾斜を加えて、まだまだ続いていた。

後記 (1) 新らしく開通した船が鼻峠越えのバスで来たFさんと無事に田島でおち会ったぼくは、暮れ方に、会津若松駅の二つ手前

で、すすだらけになってポツポツ汽車を下りた。畑小屋のアラガタの仕上げをやっているオヤカタの工場が、その近くにあるときいたからだ。

探しあてた木工場自体、貧相な小企業だった。御主人の住家の玄関が事務所になっていて、ぼくは、小さな子供下駄のちらかった玄関先にやつと腰を下ろし、Fさんは、ガタガタと音を立てる下駄箱の上にデンスケを置いて立つたまま、御主人の話をきいた。

若い頃、山仕事の苦しさで貧乏とをいやというほどなめてきた、という御主人は、「あの手間じゃ、ヤマの人たちもどうにもならん、いうことは、よく分ってるんです」と、白髪のまじる横びんをかきかき話してくれた。「ところが、こっちもバイヤーに叩かれて叩かれて、どうにもならん。……ここで材木買って、そいつを板に挽いて、アラガタにとる、みんな機械でやって引合う値段が、ほんとの値段なんですよ。若松でも、ために機械化しようっていうのは、何回かやって見てんだ。だめなんですねえ、高くついちゃって。それに手で木の目を見ながら、節をよけながらとるとちがって、狂いは大きいし、二等、三等の割がふえちやってね。山元の人も、自動車道あって、丸太を材で出せるとこはですね、絶対サラダポールつくっては合わねえんだ。だけど自動車も入らないと、アラガタとか木工品の木地として出すしか道がねえんだねえ。これ、ムジュンていうんだねえ、これ。手の仕事は、出来がよくって、ウンと安いんだなあ。」

「米国あたりの話きくと、欧洲ものは高いんだ、と。日本ものはメチャに安い、と。どうした訳だときくと、日本のはジャパン製だからだ、と。頭からそういう風に安い、ときいています。して見ると、そのしわよせがジーツと、すべてもう最後まで押されてくる。まあ、世の中で生産をしとるものっていうのはいつまでも浮かび上れんようになってるんですね。」

(2) 一九六七年秋、ぼくはテレビで昭和村の村長さんとお話する機会を得た。畑小屋の人たちがその後どうしておられるか、おめにかかるなり尋ねたのだったが、木地の仕事はとくにやめてしまった、との御返事であった。「そうでしょうねエ、そうしか仕様なかったでしょうねエ。」ぼくは何か一辺に気落ちしてそんな気の抜けた相づちを打っただけだった。